

国の元気を考える

宮城大学副学長・事業構想学部長 大泉 一貫

●日本の漂流が顕著になってきた。経済政策が確定せず、自由貿易協定は行き詰まり、少子化のスピードが早い。防衛や外交の機能不全が表面化し、人々は国家の衰退を予感しはじめた。底流にあるのは、新たな社会に向けた価値観の不在である。

こうしたときには歴史をひもとくのもいい。国家の盛衰はそれ自体が歴史でありスペインや大英帝国、オランダ等々これまで縮小した国々は珍しくない。縮小過程でこそ、また追い詰められてこそ人々は必死に考える。

●例に取るのはどの国でも良い。例えば、18世紀後半に穀作が衰退したデンマークはどうか。敗戦もあったが新大陸からの穀物輸入による価格低下が大きかった。領土は狭くなり400以上もの過疎の島々が残った。しかし、その後のデンマークの生き方は世界の誰もが知っている。

牛乳や肉は当時の輸送技術では新大陸からは運べない。そこに活路を求めた。その結果、今や世界一の肉畜・酪農製品の輸出国となっている。大事なのは「身近な消費者」を大切にする視点だった。

彼らはそれをニッチ（隙間）戦略といっている。コンセプトとしては明らかにグローバリズムとは逆の概念だが実体は見事なグローバル戦略となっている。ダーニッシュクラウンや、アーラフーズは世界の誰もが知るグローバル食品企業である。彼らはこれを協同組合主義というが、戦中の統制団体を継承した我が国の農協とはずいぶんと趣が違ふ。日本ならさしずめ株式会社主義、資本主義の典型といえよう。ノルウエーは20世紀になってから独立した国でデンマークよりさらに状況が悪かった。それが今ではサーモンや鯖など世界有数の水産輸出国に変貌している。

これらの国々を見るにつけ、我が国の一次産業はどこかおかしいと気付くべきだろう。とりわけ政策の対象となる「農家」や「漁家」概念が漂流している。

●そんな折、古島敏雄の話をはひょんなことから思い出した。壬申戸籍という我が国最初の戸籍をベース

に、職業別人口比率を取ってみると78%が農人となったという。「百姓」と呼ばれていた人々を「農人」としているが、「百姓」の職業内容が問題だという。「百姓」を今我々が見ているような「農家」と同義にとらえるには異論が多いということだ。

「百姓」はもともと多様な業の事業者とされていたというのは網野善彦や佐藤常雄の説である。「農村自営業者」といっても良い。二宮尊徳に師事した人々はそうした種類の人達かもしれない。本百姓と水飲み百姓など階層構造もたしかにあったが、漁業や、木綿工業、はたまた回船問屋なども営み、造り酒屋や藍染めなどを営みながらも基盤として農業・稲作を行っていた。その構造は明治にも引き継がれ、篤農家や老農、地主などとして存在していた。

●老農たちの「農談会」がやがて大日本農会に発展するが、そこで活躍した横井時敬が語る「小農」という言葉は、実はイギリスのヨーマンリーをみていたのではないかというのが東畑精一の理解である。柳田国男の「中農」概念も含め戦前の農学者が「農家」という場合の多くは「農村自営業者」である「百姓」を語っていた。今日の言葉でいえば、農林漁業経営者である。老農・篤農家・農村素封家などとも呼ばれ、我が国の農村では、彼らのような多くの「百姓」がイノベーターとして機能していた。横井は「一国の元気は中産に」とあると語った。

それが一連の戦後改革によって農村から消えてしまった。「魂が抜けた（ガイストロス）」としたのは、東畑精一や金澤夏樹だったが、梶井功のように、横井の思想は、「結果として……地主制擁護に終わらざるを得なかった」とする評価が戦後の農業界の多数を占めた。

知恵を働かせあらゆる地域資源をビジネスに結びつけていたのが「中産としての」「百姓」であり、「百姓」がリードする農業団体や農村社会が今あれば、我が国の農業はもっと前向きなものになっていたのは間違いない。日本の漂流を止めるにはこうした人々が必要だ。